
五天国物語～公主・虹龍～

星蘭

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

五天国物語～公主・虹龍～

【Nコード】

N0318A

【作者名】

星蘭

【あらすじ】

五天国は公主・虹龍^{コウリュウ}。小さい頃からの護衛^{ハクリュウ}、白龍黒龍兄弟と、ずっと一緒に友達でいられると思っただけ、それは彼女の思い違いだった。公主と護衛の壁。自分の気持ちに気づいた虹龍だったが…。

序章

その日、彼女は夢を見た。

何処までも続く緑。美しい花畑。

そこに3人の人影。

一人は5・6歳ほどの少女。着ている物は絹だろうか。美しい刺繍が施されていて、いかにも高そうだ。何処か金持ちの娘だろうか。嬉しそうに走り回り、花の上を駆けまわっている。

それとともに、もう一人の少年も遊んでいる。少女と同じくらいの歳で、黒い髪と瞳がが印象的だ。着ている物は、少女ほど高そうではない。よく見る、男物の中華服のようで、少女より質素だ。この服も黒い。

もう一人は少年で、二人より2・3歳年上で黒髪の少年に似ている。兄弟だろう。しかし彼は髪が白く瞳は銀だ。きている服も、少年のそのの白いもの。遊びまわる二人を見て、優しそうに笑っている。

「虹龍は可愛いね」

黒髪の少年は、少女に言った。

「そう？黒龍もかっこいいよ」

少女がそう言うと、黒髪の少年は頬を赤らめた。

「白龍もかっこいいよ」

少女は白髪の少年に言った。

「ありがとう」

白髪の少年は微笑んで、そう言った。

美しい思い出。

大好きな時。

もう戻れない過去。

一章 虹龍

彼女は寝台の上で、目覚めた。

部屋の中は、暗い。

彼女はハアと溜息をついた。

「懐かしい…」

五天国・後宮

かつて天帝が創り、王が治める王国だ。その後宮は王が暮らし、その王后（王の妻）、太子（王の息子）、公主（王の娘）、そして彼らの世話をする女官や宦官（後宮に勤める男性）がいる。

現国王には、20になる太子、18になる太子、そして15になる公主・虹龍がいる。

「ああ。懐かし…」

朝食後、虹龍は呟いた。

「何が、懐かしいんだ？」

黒い髪の少年が聞いた。歳は虹龍と同じくらいだ。

「黒龍覚えてる？あんた達が私の護衛になったころ広ーい花畑に行ったことがあったでしょ。私とあんたが5歳のときだから、もう10年前になるかしら」

「ああ、覚えてる」

黒髪の少年・黒龍が言った。

「辺り一面花だらけだったよな」

黒龍は、懐かしそうに言う。

「白龍も覚えてるよね」

虹龍は、もう一人の男に問うた。

その男は黒龍に似ているが、白髪で瞳は銀、二人より2、3歳年上だ。

白龍は虹龍の後ろに回り、髪をいじくりはじめた。

「そっか、白龍器用だもんね」

「それは、忘れて下さいと言ったでしょう」

白龍の手が震えた。

「はいはい。どうせなら可愛くしてね」

虹龍は、笑い混じりに言った。

と、それを見ていた黒龍が、

「白龍兄ずるい！俺にもやらせろ」

と、虹龍の着物の袖を引っ張った。

ビリッ

「あー！」

虹龍は、自分の袖を見た。それは少し破けている。

「黒龍、お前というやつはあ…」

白龍は、黒龍を睨んだ。

「ごっごめん！虹龍！許して！！」

黒龍は、急いで謝罪した。

「うん。別にいいんだけどね…」

「もっ、もしかしてすごく高価な着物だった？」

黒龍は、震える声で聞いた。

「えっと、そういうわけじゃないの。たしかにこれは高価なものでけど…」

虹龍は、袖の破れを示す。

「こんな小さな破れでも、女官は怒るのよ。もう着れなくなっちゃうのが勿体無くて…」

虹龍は白龍を見て、ポンと手を打った。

「白龍、裁縫が得意ならこれ縫って」

「は？私ですか？（って言うか、そのこと忘れて下さい）」

「お願い！女官に見つかる前に」

そう言うと虹龍は着物を脱いだ。

といっても、何枚も重ね着してるので、1枚脱いだところで何が

あるわけでもないが。

「別にいいですけど、この部屋、裁縫道具あるんですか？」

白龍は虹龍に聞いた。

「えっとねえ…」

虹龍は、棚の中を捜した。

「あつた」

そう言っつて虹龍の持ってきた裁縫道具は、何年も使われてなさそうな物だった。

「はい、どーぞ」

虹龍は裁縫道具を白龍に渡した。

白龍はそれで、見事に着物を直してゆく。

「おー！」

虹龍と黒龍が、そんなことを言っつて見ている間に、白龍は着物を直してしまつた。

「わーすごいすごい！」

虹龍は、渡された着物を見てそう言つた。

「あの、これくらいは女の子なら出来なくては…」

白龍は、困つたように言つた。

「だつて、白龍すごいじゃん！私だつたらこうは、いかないもん」

「おい、裁縫で男に負けてるようじゃ、嫁行けねーぞ」

黒龍が、笑いながら言つた。その言葉に、虹龍の表情が凍りついた。

「どうしました？」

白龍が、心配そうに聞いた。

「私もさ、やつぱりお嫁に行くのかな」

虹龍は寂しそうに言つた。

「父様がね、私にお見合いしろつて。次期王になる太子や、他に兄弟のいない公主が、お見合いするのは分かるの。その子供は王になるし、やつぱ、立派な家の人でないといけないのかもつて。でも、私には兄様が二人もいて、私の子が王になることはないわ。それだ

「だったら、私の相手は私が決めたい。でも、父様は絶対お見合いする
つて。それが私の幸せなんだつて。でも、私は違うと思う。父様が
決めた私が全く知らない人より、私が決めた愛する人と結婚したい
でも、こんな私を好きになつてくれる人いるのかな…」

「こつ公主様?!心配なさらずに。私が裁縫得意なのは、私が母の
手伝いをしていたからです」

白龍が早口に言った。

「手伝い?」

「はい。私と黒龍の父は、私が4歳のとき死んでしまいました。母
は幼い黒龍と私を育てるため、針仕事をしてました。わたしもそれ
を手伝っていたので」

「そうなんだ。初めて聞いた。」

「だから」

白龍は虹龍の頭に手を置いた。

「心配なさらなくても大丈夫です。公主様は、十分女らしいです」

白龍の言葉に、何故か虹龍は泣いてしまった。

「うん。ありがとう…」

「それに」

と、黒龍は言う。

「もし結婚できなかつたら、俺がもらつてやるよ」

「え〜。黒龍とだと大変そう…。まともになれるの?」

虹龍は笑い混じりに言った。

「なんだと!」

黒龍は、顔を真っ赤にして怒った。

「いいから公主様は、着物着なさい」

白龍は直した着物を見て言う。

「こんな楽しい日が、ずっと続けばいいな」

虹龍はそう思つたのだつた。

王宮の庭。

この庭は後宮とは違い、誰でも入れる。

虹龍がそこへ行くと、先客があった。

金の髪をしたその少女は、虹龍と同じくらいの歳だろうか。こちらを振り向く。

「あら虹龍。久しぶりね」

「本当に。相変わらず元気そうね、晶華」

虹龍は、五天国宰相が娘・晶華に言う。

五天国の地位はまず、王の下に宰相、その下に各官府、州候といふふうになっている。各官府は、木・土・水・火・金の5つで、木官は法律管理・罪人の処罰、土官は土地・戸籍、水官は勉学・職業・他国との貿易、火官は軍事、金官は王宮内の諸事・祭祀を受け持つ。州候は五天国の、天・木・土・水・火・金の6つの州の中、木・土・水・火・金に1人づついる。そして宰相とは、王の補佐・5官府の取りまとめ・王と共に王都天州の政等をしている。

「公主が護衛も連れず、後宮から出てもいいのかしら？」

晶華は、笑いながら言う。

王位を狙う者は少なくない。そういう者にとって、公主はかつての人間質だ。

「あいにく、今2人は訓練中です。暇だから抜け出して来ちゃった。どうせ、王宮内に変な人が入ってくることもあって、滅多に無いもの」

公主の護衛となれば、大切な役目だ。白龍と黒龍は、日々訓練を怠らない。

「虹龍はいいわよね。あんなカッコいい男2人が護衛で」

「そう？」

「そうよ。とくに白龍さんは、大人の男の人だもの」

晶華のその言葉に、虹龍は眉を顰めた。

「でも、あの2人といると大変よ。今日だってここ、破られたのよ」
虹龍は袖を示す。

「それはその分、楽しいって事よ」

晶華は虹龍の袖を見る。

「直ってる…」

「ああ！白龍がね、直してくれたの。お裁縫得意ないんだって」
「ふ〜ん」

晶華はそう言つと立ち上がり、虹龍に背を向けて歩いて行った。

「あれ？もう帰るの？」

「うん」

晶華は振り向かずには答えた。

「虹龍…」

「ん？」

「あんだ、何でも私に話してくれるのね」

そう言つと、晶華は走って行ってしまった。

(何だろう？変なの)

虹龍はその程度にしか思わなかった。

「公主様」

突然後ろから呼ばれ、虹龍は振り返った。

「あら、師走長」

そこにいたのは、水官の他国貿易長・師走長だった。

水官の中で、勉強を受け持つのは神無、職業を受け持つのは霜、他国貿易を受け持つのは師走と言う。

「こんな所にいましたか。捜しましたぞ。主上がお呼びです」

「父様が？あなたをよこして来るってことは、お見合いの話でしょ」

虹龍は溜息をつく。

「そうです。そのことを話すので…」

「師走長！」

虹龍は師走長の言葉を、無理矢理切る。

「私は見合いをするつもりはない、と言つといて」

「しかし…」

師走長は困つたような、声をあげる。

「いいわね」

「公主様あ…」

師走長の言葉を、虹龍は無視した。

虹龍が後宮に戻ってくると、廊下で2人の女官が話していた。

「あーあ。私も公主だったらなあ…」

「白龍様と黒龍様に、護衛に就いてほしいーなーってこんたんでしょ？」

「なっ何よ！ただ単に、絹の着物や玉の簪が…！」

「あははははっ！赤くなってるー」

その女官は腹を抱えて笑う。

「まったく。そう言うあんただって、同じこと考えてるくせに！」

「まゝあゝねゝ」

「ねえ。何の話？」

虹龍が言った。

「ああ公主様。公主様の護衛がカッコいいって話です」

「カッコいい？あいつらが？」

「何を言います！」

女官は声を荒げて叫んだ。

「あのお2人。とくに白龍様は、切れ長の瞳にスツととおった鼻！

勉強にも武術にも長けていて、大人の魅力を感じます…！」

そう言った女官は、虹龍と同じ位の歳だ。

「黒龍様も、あの凛々しい瞳！元気な笑顔！美しい黒髪！勉強は白龍様には劣りますが、武術は五天国でも高位の方です…！」

2人の勢いはすさまじい。

「そ、そう？」

虹龍は半ば、ビクつきながら聞いた。

「そうですね。公主様は、お2人と幼なじみだから気が付いてないのかも知れませんが、あのお2人は間違いなく美男子です。できることなら、公主様と入れ替わりたいたいと思う者もいます」

「公主って、そんないいものじゃないわよ」

虹龍はそう言うと自分の部屋に戻ろうと、廊下を歩き出した。

確かに、虹龍は自分の公主という立場を、よく思ってはいいない。虹龍は後宮から出ることがほとんどない。先にも述べたとおり、公主を狙っている者がいるため出さしてもらえないのだ。そして、後宮には王族と女官、宦官、そして白龍と黒龍のような特別なものしか入れない。宰相の娘である晶華も、後宮には1歩たりとも入れない。なので虹龍も、なかなか晶華に合えないのだ。

そして、女には政権がない。虹龍のいる時代から500年位前、1人の女帝が即位したがその治世は短く、戦乱も呼び起こした。それ以前も女は政を行わなかったが、それからの女人への政の眼は厳しくなった。

それなのに王の娘というだけで、見合いをさせられる。中には政略結婚させられて、他に好きな男がいるのに無理矢理好きでもない男と結婚させられる者までいる。

(理不尽なことだ…)

虹龍はそんなことを考えながら歩いていった。

と、フイに声をかけられた。

「オイ！虹龍！！」

虹龍は後ろを振り返った。

そこには白龍と黒龍がいた。2人は虹龍に駆け寄ってくる。

「何処言つてたんですか！心配しましたよ！！」

「無茶苦茶搜したぞ！何かあつたらどーすんだ！！」

2人は大声をあげる。

「ごっごめんなさい…」

虹龍はうなだれた。他の官から言われたのではこうは行かない。

虹龍は2人に言われたからこそ、素直に謝れたのだ。

「まったく。公主様に何も無かつたならいいですけど、本当に怒ってるんですからね！」

白龍はそう言うと、虹龍の横を歩く。

(怒られた…)

虹龍はシヨボンと俯いた。

いつも白龍は虹龍に甘い。その白龍に怒られるといつも以上に、悪いことをしたような気になる。

「おい、虹龍」

黒龍が話し掛けてきた。

「あんまり気を落とすなよ。白龍兄も俺も、本当に心配したんだからな」

黒龍にそう言われ、虹龍は白龍を見上げる。その背は頭1つ分以上違つう。

「私達は、公主様をお守りするためにいるんです。そのために後宮にも入れるんですから、守れなかつたら意味ないでしょ」

白龍は振り向かず言う。虹龍の中から嬉しさがこみあげてきて、思わず白龍に抱きついた。

「こつ公主様??!!」

白龍の声は、完璧に裏返っている。

「絶対、絶対、もう危ないことしないから。だからね」

虹龍は黒龍の腕を引いた。

「2人ともずっと私を守ってくれる?」

虹龍のその問いに、白龍と黒龍は

「もちろん」

と、言った。

一章 虹龍（後書き）

やっと第一章です。

とりあえず、ここまで読んでくれてありがとうございます。この上なくうれしいです。

次回もよろしくお願いします。

なんとなく、キャラのプロフィール載せときます。

主人公・虹龍

虹龍は、字^{あそびな}。

本名は、氏^{ギョク}・玉名^{シュ}・珠。

公主という立場を良く思っていない。

まだまだ子供でやんちゃ。

護衛・白龍

虹龍同様、白龍は字。

本名は、氏^{ヘキ}・壁名^{セツ}・雪

虹龍に、他人行儀で接する。

しっかり者で、大人っぽい。

護衛・黒龍

名^{ウシ}・雲

白龍と反対で、子供っぽい。

お調子者で、トラブルメーカー。

親友・晶華

本名は、氏^{セキ}・赤名^{ヨウ}・陽

物静か。というか、暗めな性格。

女の子らしく、恋に興味があるらしい。

二章 衝撃

「あゝ!!!」

虹龍が、大絶叫を上げた。

「ちよつと黒龍、ひつどーい!!」

「え?」

黒龍は饅頭を頬張りながら、何事かという目を虹龍に向ける。

「そのお饅頭、私のじゃない!何で食べちゃうのよ〜!!」

「え?そうなの!?ごめん!!」

黒龍は手の中の饅頭を見る。

「あとで同じの買って返すから、許して!!」

「だめなのよ!それ、売ってない『南瓜饅頭』なんだから!」

白龍と黒龍は、何だそれは、という目で虹龍を見た。

「桂鈴さん(女官)が作ってくれたのよ。中の餡が、南瓜の味なの。

試作品みたいで、売ってないのよ〜」

黒龍は、手の中の饅頭を見る。確かに餡が山吹色だ。

「うっ、酷い〜」

虹龍は涙声で言う。

「黒龍、お前つて本当に『トラブルメーカー問題機動者』だな」

白龍は、呆れた声で言う。

「ごめん。許してくれるなら、何でもするから」

「ほんと?」

虹龍は期待の目で、黒流を見る。

「ほんと、ほんと」

「じゃあ、最近ムカつくこと多いし、殴らせて」

部屋に一瞬沈黙がおちる。

「えっと…それは…」

黒龍の声は、確かに狼狽している。

「だめなの?黒龍は嘔吐いたんだね。この、饅頭泥棒!!」

「何だと!？」

「そうじゃん!ドロボー!」

「五月蠅い!たかが饅頭1つだろーが!馬鹿!鹿!」
ブツ

虹龍の頭の中で、音がした。

「言ったわね…」

「言ったよ!」

2人の間の空気は重い。

「覚悟しろ!この黒男!!」

「望むところだ!馬鹿公主!!」

2人がつかみかかろうとした。

「おい、いい加減に…」

白龍が仲裁に入ろうとしたときだった。

コンコン

扉をノックする音がした。

「おい、虹龍いるか?」

「あつ、昴零兄様?」

扉を開けると、金と銀を混ぜたような不思議な光沢の髪と、真紅の瞳を持つ青年がいた。

これが、五天国第一太子で次期王の、^{アンレイ}昴零だ。

「どうしたの?」

「暇だったから、来ただけだけど…」

そう言うと昴零は、口元だけ笑わせる。

「昨日、父上を無視したらしいね。師走長が困ってたよ」

「無視なんかしてないわ。丁重にお断りしたのよ」

虹龍は、溜息混じりにそう言う。

「あつ、そうだ」

昴零は、白龍の方を振り向く。

「父上が良いってさ。訓練時間もずらしてくれるって」

「そうですか。お礼を伝えておいて下さい」

（あーあ。最初は嬉しかったけど、四六時中護衛つきっきりつても、なんかやだなあ）

今までは白龍と黒龍が訓練中は、虹龍は1人で考え事したりなど、自分だけの時間をすごしていた。しかし、つきつきりとなるとそれができない。けっこう嫌なものだ。

「さつきから変だぞ。虹龍」

黒龍が聞いてきた。

「え？ああ、何でもないんだけどね…」

黒龍は喧嘩っ早いがその反面、単純で傷つきやすかったりする。護衛つきつきりが嫌だといえば、多分深く傷つくだろう。

「そうか。ならいいけど…」

そう言うと黒龍は、手元の本に視線を戻した。

そういえば、と虹龍は思う。

（こんなに長い時間を、黒龍と2人きりつてのも初めてか）

いつも虹龍、白龍、黒龍と3人であるから、黒龍と2人きりになるのは白龍がトイレに行くときくらいだ。そのときも、対外は短い時間の間に喧嘩をして、そこに帰ってきた白龍が仲裁に入るといった具合だ。

しかし、こんなに長い時間となると、部屋の中に嫌な沈黙がただよう。

はあ、と虹龍は溜息をついた。

「白龍兄のことでも、考えてるのか？」

急に黒龍にそう聞かれ、虹龍は目を丸くして彼を見た。

「なんで、白龍がでてくんの？」

虹龍がそう言うと、黒龍は真面目な顔をして

「虹龍は、白龍兄のこと、どう思ってる？」

と、聞いてきた。

「え？うーんと…」

虹龍は考えた。

（白龍のこと？護衛ってだけじゃないよなあ…）

そう考えていくと、分からなくなってしまった。

「分かんないなあ」

「じゃあさ、俺のことは？」

そう言われて、虹龍は

「は？」

と、思わず言ってしまった。

「あかさ。いつも、白龍兄がいて言えなかったから今言うけど」

黒龍の顔は、珍しいくらい真面目だ。

「俺は、虹龍のことがずっと前から好きなんだ」

虹龍は、目を点にした。

2人の間の嫌な沈黙が、濃度を増した。その時間がどれほどだったか、虹龍には分からない。ただ、長いようで短い間だった。

先に口を開いたのは、黒龍だった。

「どうなの？」

「どっ、どうなのって…」

虹龍は、言葉に詰まった。

黒龍の事は確かに好きだ。ずっと護衛をしてくれた、大切な幼なじみだ。それは、白龍においても同じだ。しかしその好きは、男女のそれではない。…と思う、多分。

「やっぱ、白龍兄の方が好きか？」

「そんなんじゃない！」

虹龍は思わず叫んだ。

「そんなんじゃない、ない。黒龍も白龍も、同じくらい好きだよ。でも、それは黒龍の言っているのとは、違う意味で」

「納得いかねえよ」

黒龍の声は低い。

「俺は、虹龍が好きだ。だから…」

黒龍は、虹龍の腕を掴んだ。

「だから！」

黒龍は、声を荒げる。その声に、虹龍は恐怖を感じた。

「そっそんなの、答えられない!!」

そう叫ぶと虹龍は、黒龍の手を振り解いて、部屋を飛び出した。虹龍は後宮の廊下を、がむしゃらに走った。自分が何処へ向かっているのか、それすらも分からなかった。

(どうして...)

どうしてこんなことになったのだろう。黒龍は虹龍にとって、大切な幼なじみで感謝するべき護衛だった。それがどうして...

ドンツと、何かにぶつかった。壁ではない。そんなに硬く、ぶつかって痛いものではなかった。

「どっどっしたんですか？公主様」

顔を上げると、白龍がいた。彼は虹龍の顔を見て、驚いている。

「白...龍...」

「何があっただんです？お泣きになって」

虹龍の目から、再び涙が溢れてきた。

そして、そのまま白龍の胸にしなだれかかって泣いた。

二章 衝撃（後書き）

第二章です。

やっと、恋愛ものっぽくなってきましたね。

これからも頑張りますので、よろしくお願いします。

そういえば、一章で誤字がありました。

虹龍の、

「えっと、そういうわけじゃないの。たしかにこれは高価なものだけど…」

が、

「たしかにこれは高価なものですけど…」

に、なっていました。

（「ですけど」「って、何？」）

本当にすいませんでした。

では、また三章のこのスペースで、お会いしましょう。

三章・大罪

ひとしきり泣くと、虹龍も落ち着いたようだ。

「ごめんね、白龍。もう、大丈夫だから」

そう言っつて、その場を去ろうとした。

「どうして泣いていたか、聞いてもいいですか」

「なんでも…ないよ」

「黒龍ですか？」

聞かれて虹龍は、言葉に詰まった。

「黒龍は…悪く…」

悪くないよ、と言おうとしたが、無理だった。

「うっ…」

再び虹龍は泣き出した。

廊下で立ち話も良くないと、2人は白龍の私室に行った。

全てを話すまでに、少し時間がかかった。といっても、ほとんど

が虹龍が泣いたからだ。

「そう、だったんですか」

虹龍が話し終わると、白龍はそう言った。

「まさか…黒龍が、私の事…」

虹龍の声は、涙に掻き消された。

スツと、白龍が立ち上がった。

「?どうしたの？」

虹龍は、白龍を見上げた。

「黒龍、まだ公主様の部屋にいますか？」

「多分。なんで？」

「黒龍は、大罪を犯した」

白龍は、冷たく言った。

「え!？」

虹龍は、驚きの声をあげた。

「どういことよ!」

「公主様は、王族の女性です!!王は、かつて1代目国王が天帝から任命され、代々受け継いできた役目!その王族の女性に手を出すなど、言語道断です!!わが弟ながら嘆かわしい…」

そう言つと白龍は、部屋を飛び出した。

「ちよつと、白龍!」

虹龍は、白龍の着物を必死でつかんで止めた。

「公主さ…」

「もういいから!」

虹龍は、叫んだ。

「黒龍にだつて、気持ちはあるんだから。ね、」

虹龍の言葉に、白龍は

「…分かりました…」

と、言った。公主の命令なら、聞かぬわけにはいかないのだ。

「テメエは相談しに来たのか?ノロケ話しに来たのか?」

王宮の庭に座つた晶華が、虹龍を睨んでいる。

虹龍が、黒龍事件(?)の事を話すと、晶華はそう言ったのだ。

「へ?なんで?思いつきり相談じゃん」

虹龍は、怪訝な顔で晶華を見る。

「まるで、『私は黒龍に惚れられました』って、自慢してるみたいよ」

晶華は、溜息混じりに言った。

「そうかなあ?」

虹龍は、腕を組んで考える。

「ねえ、虹龍」

「ん?」

「あんた結局、白龍さんと黒龍、どっちが好きなの?」

聞かれて虹龍は、目を丸くして晶華を見る。

「なんで、そうなるのよ!!」

「好きじゃないの?」

晶華は、首を傾げた。

「そつ、そんなんじゃないよ。白龍も黒龍も、私にとっては護衛で恋愛対象じゃない」

そつ、そういう風にしか思った事は無い。

「ふん…」

そつ呟くと、晶華は立ち上がった。

「そつ、そつ。あの2人は護衛なのよ」

「じゃあさ」

晶華が虹龍を、ニヒルな笑顔をして見る。

「あたしが何しても、恨まないでね」

晶華はそう言うと、虹龍に背を向けた。

「え?晶…」

呼び止めようとする虹龍を無視して、晶華は駆けて行ってしまった。

次の日。

部屋の中に、嫌な空気がわだかまっている。いるのは虹龍、白龍、黒龍。白龍は、黒龍の昨日の事が後を引いてるらしい。黒龍も、昨日虹龍の告白して逃げられた事が神経を逆なでしている。虹龍は昨日の事で、黒龍が何かしてこないかということより、白龍が命令を無視しないか(まあ、白龍はそんなことしそつにないが)心配だった。

と、無音の中に雑音がした。

タッタッタッタツ…

それは、廊下から聞こえてくる。

「?」

3人とも、廊下の方を見る。

ダツダツダツダツ

足音だ。しかも、1人ではなく複数だ。

「なんだ?!」

黒龍が言った。

後宮は安全な場所だ。こんな騒ぎになることなど滅多に無い。

バンツツと盛大な音を立て、扉が開かれた。

「無礼な…!」

何ごとです、と虹龍は言おうをして息を呑んだ。

入ってきたのは軍人だった。しかも、王直属の火官の軍だと、鎧で分かった。

「公主護衛・壁雪（白龍）!!」

將軍らしき男が、そう叫んだ。

「汝を公主・虹龍様に手を出した疑いにより、捕らえる!!」

「え!!?」

驚きの声を発したのは、白龍ではなく虹龍だった。

「どういうことよ!!」

虹龍は、將軍に掴みかかった。

「昨日、公主様と壁雪が後宮の廊下で抱き合ってるのを、女官が見ています」

將軍は、虹龍にそう言う和白龍に向き直る。

「公主様は、すでに鬼門国王への婚姻が決まっている」

鬼門国とは、その名のとおりに五天国の鬼門・北東の国だ。正式名称は文羽国^{ウエンウ}。しかし、長い間この2国は仲が悪く、時折戦争もしている。

「そんな公主様に傷をつけることは許されない事。これは大罪に値する!連れて行け!!」

將軍が言うや否や、何人かの兵士が白龍を捕まえにかかった。

「おい!白龍兄に何するんだ!!」

兵士に飛びかかろうとした黒龍を、白龍が

「やめろ!大丈夫だから。今は、1人でも公主様を守るんだ!!」
と言つて止めた。

兵達が白龍を連れて行くのに、あまり時間はかからなかった。
「…どういふことよ…」

虹龍は、震える声でいうと部屋を飛び出した。
父、国王のもとへ。

「お父様!！」

虹龍は、王の仕事室へ飛び込んだ。ココはもう、後宮ではない。
国王は、顔を上げた。

「なんだ、虹龍。ああ、白龍君のことかい？」

国王は、笑みすら浮かべた顔で言った。

「私は白龍のこと許すから、捕まえないですよ」

「それは、できないよ」

「どうしてよ!！」

虹龍は怒鳴る。

「お前はもう、鬼門国への嫁入りが決まっている。そうすれば、鬼門国はもう五天国に攻撃してこないって。そのために、彼は邪魔なんだ」

「なんでよ。そんな政略結婚認めないわ。なんで、私に何も言わずに、」

「言おうとしたが、取り合わなかったのはお前だよ」

国王の言葉に、虹龍はハツとした。

「何回も呼んだのに、無視したのはお前だ。鬼門国からも、返事をせがまれてね」

虹龍は自分がした事への後悔と、国王の、自分の父の言葉にシヨツクを受け、その場にへたりと座り込んでしまった。

自らの父が、自分を政治の道具にしたのだ。

三章・大罪（後書き）

お久しぶりです、星蘭です。

今回、白龍が捕まってしまいましたね。

晶華もなんか、意味有りなこといつてるし。

ま、何がなんだかは、次回で！

雑談ですが、最近私は大変でした。

テストは2ヶ月連続であるし、

風邪ひいて学校2日休んで、2日早引きするし。

「治った」

って思ったら、謎の頭痛が…。

四章・親友

「うつく…ひつく…」

部屋の中に、虹龍の嗚咽がもれる。

「……」

黒龍も、どう声をかけて良いのか分からず困っている。

白龍。彼はもちろん、大罪など犯していない。まるっきり、だれか（その現場を見たという女官か？）の、勘違いだろう。

「なんで、その女官の言を信じて、俺たちを信じないんだ…。白龍兄を護衛につけて、お前を守らせるのが、普通じゃないか!？」

黒龍が言った。

「わっ私が…鬼門国へ行くのに、邪魔だから…厄介払いもかねて、無理矢理…」

虹龍の声は、しゃくり混じりだ。

「そんなの、誤解が解ければ一発なのに!」

黒龍が、怒鳴った。

「多分」

と、虹龍のものでも黒龍のものでも無い声がした。

部屋の扉が開き、昴零が入ってきた。

「昴零兄様」

「虹龍、黒龍。答えは簡単だ。裏でとある力が動いてる」

昴零の声は硬い。

「とある力なんだそれ？」

黒龍が聞いた。

「賄賂だ」

「賄賂お!!!?」

虹龍と黒龍が、同時に言った。

「どついう事なのよ」

「父上が賄賂を貰って、白龍を捕まえたらしい」

「そんなこと言って、いいのかよ」

黒龍の言葉には、礼儀も何も無い。

確かに、王に刃向かえば昴零の地位も危ない。太子は昴零だけではない。第二太子に王位を継がせることもできるのだ。昴零が今回の事を虹龍に言ったと分かれば、王がそれをする可能性も十分ある。次期王とまで言われた昴零が、その地位から落とされる。それは、昴零自身にとって、絶望的な事だろう。

「私は、3匹の龍がじゃれるのがもう見れないとなると悲しいのだよ」

昴龍は、苦笑する。

3匹の龍。それは虹龍、白龍、黒龍の事だろう。3人の名前には、「龍」の文字が入っている。

昴零は真面目な顔になり、虹龍に向き直った。

「白龍は、その賄賂を渡した者の護衛にされるそうだ」

「誰が…」

言いかけて、虹龍はハツとした。

あの庭で、晶華が言っていた。

・あたしが何しても、恨まないでね

(まさか…)

虹龍は、恐る恐る聞いてみる。

「晶華…?」

「知ってたのか?」

昴零が、驚いた様な声をだす。

虹龍が目を見開いた。

(…そんな…)

虹龍は駆けだした。

庭へ、晶華の所へ。

庭へ行くと、晶華がいた。

「晶華！！！」

虹龍は、叫んで駆け寄る。

晶華が、怠そうに振り向いた。

「何？」

声も、何処か怠そうだ。

「何って…どうして賄賂なんて…！」

「ああ、その事か」

晶華は、薄笑いをしながら言った。

「その事って、そんな簡単に…」

「五月蠅いなあ」

晶華は、嫌そうに虹龍の顔を見る。

「別にいいじゃない。あんたにとって、白龍さんは只の護衛。でも私にとっては違ったわ。ずっと、ずっと好きだった。それで」

晶華は、眉間に皺を寄せる。

「あんたがずっと嫌いだった」

晶華の言葉に、虹龍は絶望を感じずにはいられなかった。

「公主様、公主様って皆から慕われて、美人で王族で明るい性格で皆に好かれて」

晶華の口調は、段々荒々しくなっていく。

「わたしは綺麗じゃないし、たいして地位のある家庭の出じゃないし、名前が「陽」っていうのに全然明るくないって陰口叩かれて！！」

キツと、晶華は虹龍を睨む。

「聞くのはいつも『晶華の友達の公主様』の良い噂。もう沢山よ！！」

晶華は踵を返して歩み始める。

「でも、護衛っていう近い所に居れば、手に入れられるかもしれないもの」

フンツと鼻で笑って、晶華は行ってしまった。

五天国物語～公主・虹龍～

後には、
虹龍だけが残された。

四章・親友（後書き）

どうも、星蘭です。

今回、皆さんは晶華を少し嫌いになった事でしょう。嫌いになってくれると、私としては本望です。

なんですか？話の中に1人は、ヤナ奴もいて良いかなって。

微妙な雑談ですが、皆さん私の事男と女、どっちと思ってます？「星蘭」って、ちょっと男の人の名前っぽいかなと、私は思ってます。念のために言っときますが、私は女ですよ。

微妙な雑談2

私は「幼い日の思い出」の作者、李^{すもこ}先生と、歳も同じなら、学校も一緒。この「小説家になろう」も、彼女に教えてもらいました。

そんな、最近の彼女との会話。

星）多分さ、私の事男だと思ってる人いるよ。「星蘭」って男っぽくない？

李）それなら、私の事も「すもも」じゃなくて「り」って思ってる人いるよね。

星）「李」って、よく中国人の名字にあるよね。「李」と「星蘭」合わせて、「李星蘭」って、人が1人出来ちゃうよ。

…何言ってるんだろなって思います。

でも、本当に居そうなのが怖い。

五章・本心

虹龍。この者達がお前の護衛だ。仲良くするように。

王が、父親がそう言い、目の前にいる者を示した。虹龍が、王の示した方を見ると2人の少年がいた。

2人とも叩頭礼をしている。

面を上げなさい。

王の言葉で、2人が顔を上げた。

1人は白い髪の、虹龍より少し年上の少年。もう1人は黒髪の、虹龍と同じ年くらいの少年。2人とも、美少年という言葉が良く似合う。

白い髪の少年が、正座状態の足を膝立ちにし、手を拱手させた。

壁雪、字は白龍と申します。こっちは弟の雲、字は黒龍。

それは、11年も前。虹龍と黒龍は4歳、白龍は7歳の時だった。

「白龍…」

もう何回、彼の名を呟いただろう。瞳からは次々と涙が溢れ出ている。

11年もの間、自分を守ってくれた。思い出が沢山ある11年間。いつも白龍と黒龍が、その思い出の中にいる。白龍に、怒られたこともあった、呆れられたこともあった。もう、自分なんか護衛してくれないかも、と思うほど、彼を怒らせたこともあった。でも彼はいつも自分を守ってくれた。

1度だけ、刺客によって送り込まれた女官に殺されそうになった。女官はかなり強い殺し屋で、虹龍は危機一髪という所だった。そこを助けてくれたのは、まぎれも無く白龍と黒龍だった。その時、白龍は腕に切り傷を負った。深くはなかったが、二の腕を5寸（約

15センチ)位切った。痛いはずなのに、白龍は自分の腕より、無傷の虹龍を心配していた。

虹龍は白龍の事が好きだった。

としてではなく、友達として好きだった。

しかし、とてつもなく悲しい。

忘れていたのだ。虹龍はいずれ誰かと結婚する。白龍もいずれは誰かと結婚する。2人は

同士ではないのだから、当然の事だ。いずれは離れていく。白龍ももう18歳。いつそ

うなっても、おかしくはないはずだ。その相手が晶華でも。

「虹龍は、白龍兄のことが好きなんだな」

黒龍が言った。

「え？」

「そういうことだろう？だから、白龍兄が護衛でなくなつて、違う女の護衛になつて悲しい。それって、白龍兄のことが好きつてことじゃん」

黒龍は微笑みながら言う。普段の黒龍からは想像できない、落ち着いた笑みだ。

「そんなことはないよ……」

心の何処かで

玩具をとられた子供と同じだ、

と言う声がする。

「じゃあ、白龍兄が晶華に盗られちまつていいんだな」

「いいよ」

「いなくなつちまつていいんだな」

「……いい……よ」

「他の女と一緒になつて、お前の事なんか忘れちまつていいんだな」

「……いい……い」

虹龍には言えなかった。声は涙にかき消され、その場に座り込んでしまった。

「虹龍…」

黒龍は、虹龍を抱きしめた。

「自分の気持ちに正直になれ。意地張んな。本当に白龍兄のこと好きなら、取り戻せ。俺もそれに協力する」

「黒…龍…」

虹龍は黒龍にもたれ掛かって泣いた。

「…ごめん…本当に」

黒龍は、虹龍のことが好きなのに、虹龍に協力してくれる。黒龍にとっては酷なことだろう。

「よっしゃ。善は急げだ。行くぞ！」

黒龍と虹龍は立ち上がった。

「うん」

虹龍は頷く。

2人は部屋から飛び出した。大切な人を取り戻しに。

しかし、その計画は一瞬にして邪魔された。

「聞きましたよ。公主様、壁黒龍」

言ったのは、部屋のすぐそばにいた片手に長い棒を持った兵士。

火官・王直属の軍の兵士だ。

「公主様、壁白龍のことが好きなのなら、余計逢わせるわけにはいきません」

兵士の声は淡々としていて躊躇がない。

虹龍と黒龍は、驚愕に目を見開いた。

そのころ、白龍は赤家邸、つまり晶華の家に連れてかれていた。

「白龍」

白龍を見るなり、晶華は彼に声をかけた。その口調は、虹龍と話すときとは違い、甘い女の声だった。

「何故、こんな事をした」

白龍の声には、愛情の欠片もない。多分、賄賂のことを知っているのだろう。

「決まっています。貴男を手に入れたかったからです」
晶華は、白龍の胸にしなだれかかる。
「好きよ。白龍…」

五章・本心（後書き）

お久しぶりです。星蘭です。

とうとう、虹龍が自分の本当の気持ちに気づきました。

恋愛ものは苦手なので、書くとなると大変です。

まあ、話もだんだん終わりに近づいてきました。

関係ない話のようですが、私が相手役を白龍にしたのは、私の好みのせいです。

年上のクールな人が好み…。

それでは、また次回もここで会いしましょう。

第六章・戦乱

長い廊下を、周りを兵達に囲まれながら、虹龍は歩いて行く。

(何処へ行く気がしら…)

虹龍の脳裏を、そんな感情がよぎった。

虹龍が白龍のことが好きなのがばれば、即刻王の所へ連れて行きそうなものだが、どうやら違う様だ。

黒龍は、虹龍とは別に連れてかれてしまった。多分、白龍の様に2度と会えなくされてしまつか、最悪、王に背いたとして牢に捕らえられるかだろう。

(心配している余裕は、私には無いけどね)

虹龍は、まず自分の心配をするしかなかった。

「ちよつと…。どうしてここへ来るのよ…」

目的地に着いた途端、虹龍は思わずそう呟いた。

そこは、虹龍の兄の部屋だった。と言っても、昴零の部屋ではない。第二太子 東乱の部屋だ。ギイと音をたてて、部屋の扉が開いた。

「どうぞ、お入り」

中から、男の声がした。

虹龍は、部屋の中に入って行く。

部屋の窓辺に、1人の男がいた。つり目で、お世辞にも美人とは言えない顔だが、この男が虹龍のもう1人の兄なのだ。虹龍や昴零とは、全く似ていない。

ここで少し、この東乱について述べておこう。彼は間違いなく虹龍と昴零の兄弟だ。が、父親が同じなだけで、母親が違う。

元々、虹龍と昴零の母親である王后は体が弱く、彼女に子供が出来なかつた時のために側室がいた。五天国では、側室は王后の許し

が無ければ迎えられない。事情はまた、別の話のときに述べよう。その側室の子が、東乱というわけだ。結果的には、王后の方が早く昴零を産んでしまった。

が、この側室が東乱を次期王にするために、昴零を暗殺しようとした。また、前章で書いた虹龍を殺そうとした女官も、この側室がしかけた。

そんなわけで、側室は後宮を追放されたのだが、王の正統な子である東乱だけが、後宮に残っているわけである。

「どうして、東乱兄様の所へ連れてこられるのかしら？」

虹龍は棘のある口調で言った。

「君が、妙なことしようとするからだよ」

東乱は、薄笑いを浮かべながら言う。

「そうじゃなくて、どうしてお父様の所じゃなくて、ここか聞いているの」

虹龍の眉間に、しわがよった。

「私も、君に聞きたいことがある」

東乱は、急に話を切り替えた。どうやら、虹龍の質問に答える気が無いらしい。

「どうやら、君の所に本来伝えるべきではない情報が入っているようだ。賄賂の事や、晶華と白龍の事。誰が君に教えたんだい？」

答えは1つ、昴零だ。

「それを聞いて、どうするの？」

虹龍が言った。

「それは君には教えられないな」

「なら、言わないわ」

虹龍は東乱に背を向け、部屋を出ようとした。

「何処へ行って、どうする気だい？」

「もちろん、白龍の所よ」

「君1人で何が出来る。黒龍もいない。後宮で育った『公主様』に

出来ることなんて、たかが知れてるよ」

東乱の嫌味つたらしい声が、虹龍の頭に火を点けた。

「あんたに言われたくないわ！名前だけで実力の無い太子になんか！！全て昴零兄様に劣っていて、同じ父親をもっているなんて嘘みたくないあんたに！！！」

クスツと、東乱の笑い声が聞こえた。

「私はあいつとは違うよ。欲しい物は、何をしてでも手に入れる」
自信満々の東乱の声がしゃくにさわり、虹龍は何も言わず部屋を出て、自分の部屋に向かった。

後宮の公主の部屋は広い。当然のことだが、虹龍には今日ほど、この部屋が広いと思ったことはなかった。

部屋の中には真夜中だというのに、明かりひとつ無い。

虹龍は東の空を見ながら、物思いに耽っていた。東の空は、ほんのり明るい。夜明けが近いのだろう。

虹龍が考えているのは、昼間の東乱との会話のことだった。

欲しい物は、何をしてでも手に入れる

東乱がどうもがいても手に入らないもので、そして欲しがりそうな物は王位だ。そうすれば、全て説明がつく。

賄賂の事や、晶華と白龍の事や。誰が君に教えたんだい？

もし、あそこで虹龍が昴零がばらしたと言え、それは昴零が王に背いた証拠になる。

多分東乱は、そんな情報を探しているのだろう。昴零が居なければ、東乱に次期王の位がまわってくる。虹龍の夫が王になる可能性もあるから、鬼門国にかせる。そうすれば、邪魔者は消えて、東乱に王位が落ちてくるだけでなく、現王の信頼も貰える。

(そうだったのか…)

全てが分かった虹龍は、フツとあることに気が付いた。

東乱の元に連れて行かれる原因となったのは、黒龍との会話を部屋の外にいた兵に聞かれてしまったからだ。しかし、何故部屋の外に兵がいたのだろう。後宮には、よっぽどの事がなければ入れない何か、理由があつたはずだ。

東の空が本格的に明るくなってきた。太陽が地平線から顔を出す。

(朝か…)

虹龍は、ぼんやりそう思った。結局、一睡もしていない。

と、何処からか妙な音がしてきた。地響きのようなその音は、地震の時の様だが今は全く揺れていない。

(何?)

そう思ったとき、太陽と同じ所に黒い影を見付けた。それは次第に近くなってくる。

人だった。何万という武装し武器を持った人の群れ。中には馬に乗った者もいる。

軍だった。しかも、五天国のではない。

恐らく鬼門国の。

「どうということよ…」

虹龍は思わず呟いた。何故、鬼門国の軍がここに来る。

「東乱兄様!!」

叫びながら、虹龍は東乱の部屋に飛び込んだ。窓辺の椅子に座っていた東乱が、目を見開いた。

「なんなの、あの鬼門国の軍は!」

虹龍の質問に、東乱は眉根を寄せた。

「君のせいで、ここまで来てしまったんだよ。奴等は」

「奴等とは、鬼門国の軍の事だろう。」

「やはり、待つてはくれなかった様だ。昨日、君を渡すつもりだっ

「だから」

「え……？」

虹龍は、自分の耳を疑った。

「どういうこと？」

「君は昨日、鬼門国へ行くはずだったんだ。あの、鬼門国の軍に連れられてね。後宮から約束の場所までは、うちの軍が送って行くつもりだったけど」

「……」

虹龍は、暫く声が出せなかった。

つまり、昨日虹龍の部屋まで来た兵は、虹龍を鬼門国の軍の元まで送るために来たのだ。しかし、虹龍と黒龍の話聞いてしまった。虹龍が来ないから、鬼門国の軍はここまで来た。

「もう、鬼門国の兵は、攻撃態勢に入っている」

東乱が、窓の外を見ながら言った。

スツと、虹龍の顔から血の気が退いた。

（私の、せいなの？）

虹龍が、鬼門国へ行きたくないと言ったから、白龍のことが好きと言ったから。

ドンツと音がした。鬼門国の軍が大砲を撃つたのだろう。後宮が戦場となるのだ。

私のせいでは？

私の気持ちに関係なく

私がいけないの？

じゃあ！

虹龍は、床に座り込んだ。

「なんで皆のために、私一人が犠牲になれば良かったとか言うのよ

お！……！……！」
涙は出なかった。悲しみより、怒りが全てを支配した。

六章・戦乱（後書き）

こんにちは、星蘭です。

前回まで、実は私の考えた初期設定とずれてて、

「やべえー。話にまとまりつかなくなったら、どうしよう…」
とか思っていました。

とりあえず、今回で初期設定、というか、本当に私が書きたかった話を書いて良かったです。

ただ、東乱は急に出てきたキャラクターです。

なんとなく出しただけだったりするけど、重要キャラになりかけている。

それではまた、次回の後書きで会いましょう。

七章・難壁

すくつと虹龍は立ち上がった。扉を開けて、東乱の部屋を出ようとする。

「何処へ行く気だい？」

東乱が聞いてきた。

「勿論、白龍の所よ」

虹龍はきっぱりと言った。

「行ってどうする」

「自分の気持ち、言うのよ」

「止めておいた方がいい」

「どうしてよ！...！」

虹龍は、振り返って叫ぶ。

「じゃあ言うが、白龍は君の事をどう思っていると思う？」

虹龍は、東乱の言っている言葉の意味が良く分からなかった。

「どうということよ」

「白龍の気持ちか、お前に分かるか？」

「分かるわけ無いでしょ。他人の気持ちは分からないわ。だから、

私は自分の気持ちを伝えに行く」

伝えなければ、この気持ちもなんの意味も無いものになってしまう。
う。

「…君は自分の気持ちに気づく前、白龍をどんな目で見ていた」

つまりは、虹龍にとって白龍は何だったかと聞いている。

「黒龍と一緒に私を守ってくれた、大切な護衛で幼なじみよ」

「では、白龍は君の事をどう思ってたと思う」

虹龍は少し考える。

「分かんないわよ。他人の気持ち…」

「そうじゃない」

東乱は、虹龍の言葉をさえぎった。

「どう思うかだ」

虹龍は、また少し考える。

「…幼なじみなんじゃないの？」

「そうかな」

東乱は、意味深な口調で言う。

「多分『幼なじみ』なんてものじゃないな」

「回りくどいわね。はっきり言いなさいよ」

虹龍は、東乱を睨む。

「彼にとって君は、王から命じられた役目の一部だよ。護衛だから守るわけであって、それは王からの命であるからだ。君は彼にとつて『虹龍』では無く『公主様』だ」

東乱の言葉に、虹龍は目を見開いた。

「そんな、白龍は…」

言いかけて、虹龍はフツと思った。

名前を呼んでもらったことは無い。いつも彼は『公主様』と呼んでいた。確かに距離を置いた呼び方。

「白龍は、私に優しくしてくれた…」

虹龍は、呻く様に言う。

「当然だ。君は王族の、しかも王と王後の正統な公主。そして守るべき存在」

虹龍は、頭を抱えた。

言われてみれば、白龍は虹龍に優しくすぎたではないだろうか。

本当に虹龍を好きになつてくれた黒龍は、『虹龍』と呼び捨てで呼んでいたし、遠慮も何もなかった。『公主様』でなくて『虹龍』を好きになつてくれていた。

（そんな…）

『私、白龍が好き』

頭の中で、白龍に告白する自分の映像がながれる。

『公主様…』

答えようとすする白龍の顔は苦しそうだ。

「私は、公主様の気持ちには答えられません。公主様と私では、身分が違いすぎます」

彼はきつと、そう答える。

公主と護衛の間には、確実に一つの、それも厚く高い壁があるのだ。まさに「難壁」と呼ぶにふさわしい物が。

「それでも…」

虹龍は、拳を握り締める。

「それでも、私は白龍が好き！」

何があるかと、変えられない感情。それが恋心。

フツと、東乱は窓の外を見る。

「今君を鬼門軍の兵に渡せば、彼らは攻撃を止めてくれるかもしれない。王宮にいる何人も人が助かる」

王宮の人の変わりに、虹龍に犠牲になれと言っている。

「あの人たちが欲しいのは『公主』よ。だったら私は『公主』を辞めるわ。王宮からも出て行く。贅沢な生活なんていらぬ。白龍にも、私として告白してくる」

虹龍はうつむいて、微笑む。

「最初から、『公主』なんて嫌だったのよ。自由も無い、今回だって『公主』ってだけで『私』の気持ちは無視。そんなの嫌だわ。私は『私』よ」

「そうだな」

急に扉の外から声がして、虹龍と東乱は驚いた。

扉を開けて入ってきたのは、昴零だ。

「本当は虹龍を迎えに来ただけで、どうやらその必要も無いみたいだ」

そう言いながら、昴零は虹龍に近づく。

「王宮の者は皆、『後陰の宮』に避難した」

後陰の宮とは、王宮の北の森の中にある宮殿で、殆ど使われていない。その昔、王が自分の母親や、退位した父親を厄介払いするために使われていた、なんとも嫌な感じのする宮殿だ。が、今回の様

にも使える。石造りで火に強いし、しっかりしているので雨風も防げる。

「東乱も早く行け。ここはもう安全ではない。そして虹龍」

昴零は、真剣な顔で言う。

「公主を辞めるならもう後陰の宮にも連れて行けない。誰も助けくれない。それは白龍君や黒龍君も、ということだ。自分で何とかしなくてはいけない。後宮育ちの女には苦しいぞ。それでもいいか？」

昴零の言葉を聞き、虹龍は頷いた。多分、昴零にも、もう会えなくなってしまうだろう。そう思うと、涙が溢れそうになる。しゃべったら、なおさらだ。

昴零は微笑み、そして虹龍を抱きしめた。

「お前は私にとって大切な妹だ。公主じゃなくても、それは変わらない」

昴零は虹龍を放す。

「今までありがとう。ばいばい」

虹龍は別れの言葉を言い、そして部屋を出た。

扉を閉めた瞬間、瞳から涙が溢れた。

手の甲でそれを拭くと、虹龍は廊下を走り出した。

白龍の元へ。

もう、後ろは振り向かない。

七章・難壁（後書き）

こんにちは。

今まで以上に、早く話が書けました。自分でも驚きです。

今回、虹龍と昴零の別れのシーンを書きながら

「永遠の別れ。悲しいけど、それほどまでに虹龍は白龍のことが好きなのね」

とか思っていました。

さてさて、話もあと少しで終わるでしょう。

恋心という名の感情で、少し成長した虹龍を見ていって下さい。

あと、感想なんかもらえると嬉しいです。

八章・告白

昴零と東乱は、虹龍が出て行った扉を見ながら、暫くの間沈黙していた。

先に口を開いたのは、東乱だった。

「いいのかよ、虹龍逃がしちゃって」

対する昴零の答えは無い。無視をしていた。

「おい…！」

東乱の声は、一瞬でかき消された。喉に、小さな痛みと流れる生暖かい物。昴零の剣先が、東乱の喉に当たっている。

「だまれ…」

そう言った昴零の声は、虹龍に話し掛ける時とは全く違う、低く冷たい声だった。

「な…に…を…」

東乱の声は、恐怖で苦しそうだ。

次に言った昴零の言葉は、衝撃的なものだった。

「俺は、国王だ」

東乱は、目を見開いた。

「王はさつき、流れ弾にあって死んだ。だから、俺が国王だ」

この時から後々語られる、昴零の恐怖政治が始まるのだが、それはまた、別の話である。

人目を盗んで後宮から出るのは、至難の業だった。虹龍は結局、窓から外へ出た。しかし、戦地となった後宮は悲惨な物で、昨日までの華やかさはもう無かった。

（さようなら、私の育った場所）

最後の別れを告げ、虹龍は走り出した。

（何処だろう？）

虹龍は、考えた。白龍は何処に居るだろう。

立ち止まって考えていると、最悪の事態がおきてしまった。

「あ、あんな所に女がいた!!!」

後ろから、男の声がした。

振り向いて見てみると、兵士がいた。しかも、鬼門国の。

さあつと、血の気が引いた。

(見つかった)

今の虹龍には、身を守る術が無い。

兵士が走って近づいてきた。

(逃げなきゃ!!!)

虹龍は、全速力で逃げ出した。しかし、相手は兵士。簡単に追いつかれて腕を捕まれた。

「はなしなさいよ!!!」

腕を振り解こうとすると、逆に捻り上げられてしまった。

「ん?こいつ...」

兵士が虹龍の格好を見て、眉をひそめた。

「どうした?」

他の兵士が、近づいてきた。

「見ろよ、こいつの袖口」

「あつ!!!」

兵士は、虹龍の袖口についていた蘭の花の模様を見て、驚きの声をあげた。

「王族の紋章...」

虹龍は

(しまった!!!)

と思った。

五天国では、蘭の花は王家の象徴。王族のみが、蘭の花の刺繍を袖に付ける事が許されている。

「こいつ、公主だ」

(どうしてよ)

虹龍は、兵士の声を聞きながら思った。

(どうして。折角ここまで来たのに)

多分、このまま虹龍は鬼門国へ連れて行かれるだろう。公主の地位を捨てた事なんか、相手には関係ない。

(絶対、そんなの嫌だ!!!)

そう、強く思った時だった。

「その手を離せ」

懐かしい声が出た。

「誰だ、お前」

兵士が言った。

「離せと言っている!!!」

怒気を含んだ声とともに、ドカツ、と音がして虹龍の腕が自由になった。

「大丈夫ですか、公主様」

そう言ったのは、この世で一番好きな人。

「白龍…」

虹龍は、思わず呟いた。

「どうしてここに…晶華は？」

「後陰の宮です。私は公主様を守るためにここへ来たんです」

その言葉を聞いて、虹龍の瞳に熱い物がせり上がって来た。

我慢できずに、虹龍は泣いてしまった。

「公主様？」

白龍は、困惑した。

「私…もう、公主なんかじゃないよ…。後宮を、でてきたの…」

鬼門国へ…行くのが嫌で…逃げてきたの、『公主』から。それでも

…私を守ってくれるの…？」

虹龍は、涙混じりに聞いた。

「勿論です」

白龍は、キツパリと答えた。

「あなたが誰であろうと、私は守ります。それを、私は望んでしている」

白龍は微笑んだ。

虹龍の気持ちだが、最後の壁を破って表に現れた。
そして、虹龍は白龍の胸に飛び込んだ。

「…好き…」

小さく、しかしはっきりと虹龍は言った。

八章・告白（後書き）

ども、星蘭です。

今回、最初の方昴零が怖い…。

彼は、また書きたいお気に入りキャラです。

さてさて、話はどとうの急展開。

虹龍の恋はどうなってしまうのか。

では、次回もよろしくおねがいます。

九章・逃亡

好き

その一言を言ったために、人はとてつもなく苦労する。

言いたい、躊躇うこと無く言ってしまういたい。

しかし、その一言は言いにくい。

言えないまま、その思いを消してしまう者も多いだろう。

その『好き』には、『好む』以上のものが含まれているのだから。

虹龍はその一言を言うために、『公主』である自分を捨てた。『

公主』として得られる物を全て捨て、それとともに『公主』として

失うものを守り抜いた。それが、虹龍にとっては、白龍だったのだ。

「公主さ……」

「言わないで！」

虹龍は、白龍の言葉を遮った。

「私、もう公主じゃない。捨ててきた。だから、もう公主じゃない」
言ってる言葉の文が、少しおかしい。虹龍は、完璧からまわつて
る。

「……いつてえ……」

倒れていた兵士が起き上がった。

「テメエ、よくも！」

兵士は、白龍に殴りかかった。さっき、殴られたあげく気絶させ
られたのだから、仕方が無いといえれば仕方が無い。

と、その兵士は再び、気絶した。横から何者かに、殴られたらし
い。

兵士を殴った人物を見た途端、虹龍は目を見開いた。

「黒……龍……」

虹龍は、思わず呟いた。

「見たか！悪者はこの黒龍様が叩きのめした！！」

気絶した兵士を踏んづけて、黒龍は言う。兵士が少し可哀想だが…。

「どうして…。今まで何処に…」

「牢屋だよ。でも、外はこの有り様。牢破りなんて簡単どころか、見張りがいなくなっちまった」

黒龍はそう言うと、ニカツと笑う。

「この野郎！数ならこっちの方が上だ！！」

何人かの兵士が、こっちに向かってくる。

「やべっ！白龍兄！虹龍！逃げる！！」

黒龍は、かまへの姿勢をとる。

「ちよつと黒龍！あんな数相手にするなんて、いくらなんでも無理よ！！」

虹龍はそう言ったが、黒龍は姿勢を崩さない。それどころか、

「白龍兄！虹龍つれて逃げる！何があっても兵士に追いつかれんよ！！」

と、言った。

「わかった」

白龍は頷くと、虹龍をいとも簡単に抱え上げた。世に言う「お姫様だっこ」だ。

「ちよつと、白龍何すんのよ！！」

虹龍は暴れ出すが、白龍は放そうとしない。何よりも、白龍が虹龍ごときに力で負ける分けないが。

「虹龍！！」

黒龍の声に、虹龍が暴れるのが、少し和らぐ。

「何よ！！私はもう、守られない！守られるだけの『公主』じゃないんだから！！」

虹龍は、さらに暴れる。

「だからって、折角手に入れた自由手放すじゃねえ！！ここで捕まったら即、鬼門国行きだぞ！！」

黒龍はそう言うと、虹龍達に背を向けて戦い始めた。
虹龍はすっかり大人しくなつて、白龍は彼女を抱えながら走つた。

王宮の北は森。そこを白龍は虹龍を抱えながら走つてゆく。

虹龍は、泣いていた。

「泣かないで下さい。黒龍は、護衛としての役目をまっとうしたのですから」

白龍はそう言うが、虹龍は泣き止まない。

「黒龍、私達のために……。もし……。もし黒龍負けちゃったら！負けて、鬼門国に連れてかれて、殺されちゃったらどうしよう！！もしかしたら、さっきの兵士にもう殺されちゃってるかもしれない！！！」

虹龍は、白龍にしがみ付いて声をあげて泣いた。

「大丈夫ですよ。あいつは、あれでも強い。負けたりしません。それに」

白龍は、虹龍の顔をのぞきこむ。

「貴女が信じてあげなくてどうするんですか」

白龍は、微笑む。

「そつだね」

虹龍は、泣き止む。そして、黒龍を信じようと思うのだった。

「ああっ！」

虹龍は、急に大声を上げた。

「なっ何ですか！」

白龍は、驚いてそう言う。

「返事、聞いてない」

「返事い？」

「私がアンタのこと、好きだつてことだよ……」

虹龍の言葉を聞いた瞬間、白龍は派手にこけた。

「だっ大丈夫、白龍」

虹龍は、白龍をみて言う。

白龍は上手く、虹龍をかばった。

「何言うんですか……」

白龍は虹龍を見ながら言う。

「返事！」

虹龍はズイツと白龍に詰め寄る。

「返事って……」

白龍は、顔を真っ赤にしながら言う。

「白龍？」

虹龍は白龍の顔をまじまじ見て、自分も真っ赤になった。

だてに、幼馴染みをしていない。白龍の性格からして、断るならきっぱり断るだろう。断らないという事は……。虹龍は、そこまで鈍感ではない。

「返事……」

虹龍は、真っ赤になりながらも言う。

「……」

暫くの沈黙。

「好きですよ。私だって、公しゅ……」

『様』まで言えなかった。

白龍の唇は、虹龍の唇にふさがれていた。

短い接吻の後、虹龍は微笑む。

「私、もう『公主』じゃないって言ったでしょ」

その後、虹龍と白龍がどうなったか、五天国の王宮の記録には無い。

九章・逃亡（後書き）

ども、星蘭です。

やっと、虹龍は両思いになれました。

長かった。（私が書くのが遅いだけが…）

もともと、恋愛系は苦手な私が、こんな恋愛物書くなんて…。

この『九章・逃亡』は、最後の方書いてるとき、恥ずかしくて顔から火が出そうでした。（んなわけ、あるかい！！）＼（、、*）バシッ！

あと、最後に『終章』がつきます。

最後まで読んでくれると、有り難いです。

感想なども頂けると、嬉しいです。

終章

彼は只、歩く。その人達のもとへ。そのために、6年も辛い日々をおくった。

家の扉を開けて空を見ると、今日も1日いい天気になりそうな空だった。

彼女は、微笑んだ。

「おかーさん」

4歳になる娘が、足に飛びついてきた。

「ちよつと、珠李^{シユリ}。お母さん、畑に行かなくちゃいけないんだから我が子にそう言いながら彼女は外を見て、ハッと息を呑んだ。遠くからでも、しっかり分かった。

「…」

幼馴染みでありつつ、夫の弟である義理の弟がそこにいた。

「黒龍!!」

彼女はそう言うと、その男の元へ走り出した。

「虹龍。どうし…」

家の中から顔を出した彼女の夫も、すぐに顔色を変えて走り出した。

公主・虹龍、護衛・白龍の駆け落ちから5年。

鬼門国との戦いも、終止符を打っていた。

虹龍は白龍との間に子供ができ、普通に農民となって暮らしていた。

只、自分達を逃がしてくれた黒龍が、どうなったかが気になっていた。

「俺さ、鬼門国の捕虜になってたんだよ」

黒龍は、虹龍と白龍にそう言った。
黒龍は捕虜になった時の話もしてくれたが、それは又別の話だ。

虹龍は、海辺の崖に来た。

時々、ここに来るのが彼女の日課だった。

「虹龍」

後ろから、黒龍が話し掛けてきた。

「うん？」

虹龍は、振り向かずに答える。

「ここ、いい所だな」

「そうでしょ。ここからは、とっても良く海が見えるの」

虹龍は、フツと笑う。

「私、いつか珠李が大人になって、素敵な旦那さんと結婚して幸せになったら、この海の向こうに行ってみたいな」

虹龍は、クルツと振り向く。

「もちろん、白龍やあなたと一緒にね」

黒龍の、フツと微笑む。

虹龍は、公主を辞めた。しかし、虹龍は5年前の虹龍と変わって
いなかったのだ。

その後虹龍は珠李以外にも、男児2人、女兒1人の子宝に恵まれ
た。

黒龍は誰とも結婚せず、73歳で死ぬまで旅をしたという。

虹龍はというと、海の向こうに行く事無く、普通の女として生き

た。

白龍が87歳で死ぬと、その翌年、後を追うように85歳で死

だ。

普通の人生の、普通の幸せを手に入れた、幸せな最後だったと言
う。

終章（後書き）

やっと完結できました。

今まで読んで下さった方、ありがとうございます。

この「五天国」は、この虹龍の話以外にも、たくさんネタがあるんです。いつか、続きを書きたいな。

さて×2。

次に私が書く物語は、ファンタジーではなく普通の恋愛物です。なんと、「幼い日の思い出」や、「僕等」の作者、李大先生がくれたネタを、私が小説にした物です。

楽しみにしていてください！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0318a/>

五天国物語～公主・虹龍～

2008年11月7日06時35分発行